

< 無線綴じ本の修理 > (鋸目<sup>のこ</sup>)

無線綴じの本のページがバラバラ外れてきた場合の修理について、「テキスト5 - 1」では三つ目綴じによる修理を紹介した。しかし、ノド部の余白がなかったり、少ない場合には三つ目綴じはできない。情報が隠れてしまうからである。また、あまりぶ厚いと、開きが悪くなる三つ目綴じでは適さない場合もある。

その場合の修理方法として手っ取り早いのは、ふたたび接着剤で背を固め直すことである。

その方法について都立図書館で行っている例を紹介する。

接着剤で固め直すといっても、それだけではまたしばらく利用していると同じように破損してしまう恐れがある。ここで紹介する方法は、背に麻(糸)を埋め込むことで少しでも破損しにくくしてある。

それでも強度は、三つ目綴じの場合に比べて格段に弱いことをあらかじめ認識しておく必要がある。

なお、三つ目綴じによる方法と作業が違うのは、その綴じ方の部分のみである。他の工程については「テキスト5 - 1」と同じなので、そちらを参考にしてほしい。

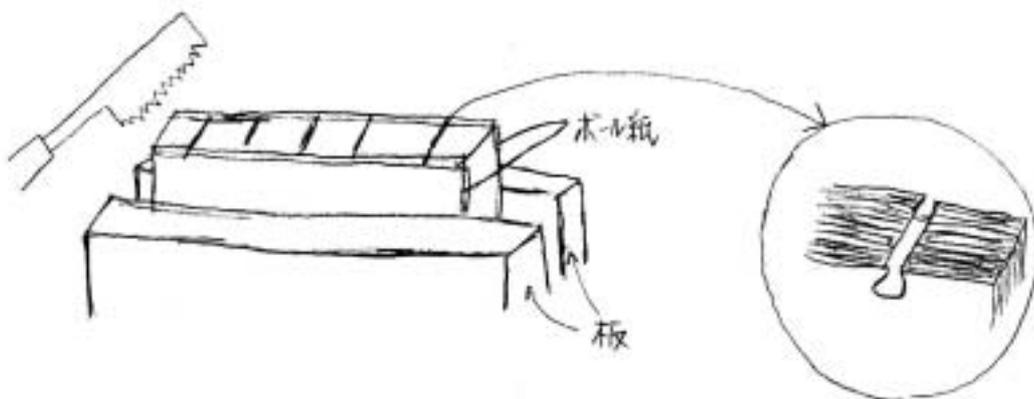
【鋸目を使った綴じ】

きれいにした背に、鋸(糸鋸)で切れ目(鋸目)を入れる。

鋸目の本数は多ければ多いほど強度が増すが、通常は3～5センチ間隔で入れる。

資料そのままでは安定せず、鋸目が入れにくいので、厚ボール紙で挟み、さらに、板で挟んで、それを締め機やクランプなどで挟んで安定させて行う。

鋸目のくぼみ(凹)の大きさは麻(糸)を埋め込む程度。また、形は図のように(逆)台形になっていると強度が増す。



鋸目に接着剤を入れながら、背幅 + 4センチ程度に切った麻(糸)を埋め込んでいく(背から2センチ程度ずつ飛び出る)。糸の場合、縫りを戻して、糸の隙間にも接着剤が入るように埋め込んでいく。

このときの接着剤は、通常使用する紙工作用や木工用ボンドより強力なボンドを使用することが多い。ページが外れやすい無線綴じの強度を増すためである。

背全体にも接着剤をたっぷり塗る。

乾いたら、背幅より飛び出した麻(糸)を、5ミリ程度ずつ残して切りおとす。

その麻(糸)は、ほぐして左右に振り分け、図のように本体に貼る。

